



鳳巾の晴

狸廻之部

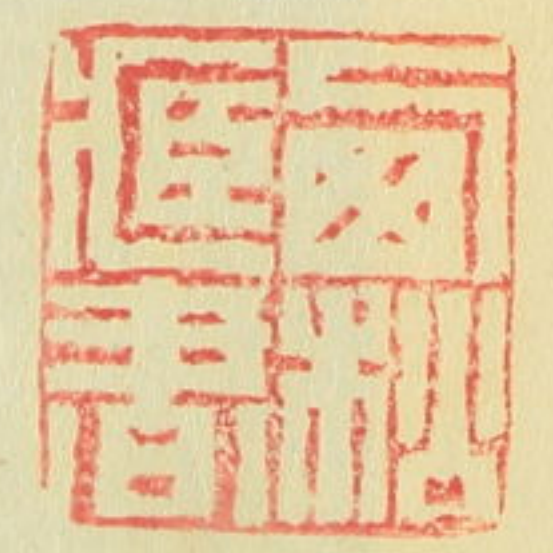
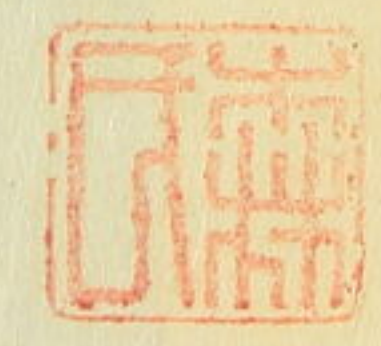
七



周防

ふお

三百里程の漂泊も是を是とて三百里を  
おとて周防の山に上りてこの月を約  
装りて一々月ののり先をんを水と  
長城の林に軍を逐て玉とありての  
ハ部を石見の益両なる稻穂山に  
世の中より此の程程ひては和舟を  
うりのき花も名もあふ山ゆりより  
向程の余他ありて合はぬとて地  
入事ありてこの人々も他たつた  
折よおあるふ山とてつるを  
今月の強きを信じてを地や



むのーい九ろの教とく川一とちと時の  
玉のちれあひひさちちより一津よそれ外  
ありて神社佛宮はとく一つ絶きり  
わちまゑるともあふ山と幸ひ南とと一  
ちよは近よ一て市廊の凡縁その中  
よ今しそのそやをとうちありとちあな  
まれんそくちまの月とと心とこのく  
まう延雲の小家つりて心とくくをよ  
のうねは山のちとちよを有りとき  
めんとまらし係りまひく係よちうと  
羅羅行脚の一徳よとありまね

木のより指ありくしきふの月

つ小坊

長門

あふ

地むう一神功居まのそ船と遠とせま

ま方の海子船木の滑れさしあふん

つ小坊

むりーちうく此月もたひりく

山之

まろのーいそなまハ言よ才も冷く

文狂

名録

まろの月やん絶ぬちのあふ

文狂

苗代より多々の青ねやうききー

青紅

焼ぬきやうききー

嵐之

吉田

この山は光の防の山にその山奥と片  
きしり得る所の山にその山奥と片  
あつりよき山よし山よ安山何れの山  
其を産この山よりあつりよき山よの山  
送る山よその山よあつりよき山よの山  
山よあつりよき山よその山よあつりよき山よの山  
とて四山山よその山よあつりよき山よの山

山よあつりよき山よその山よあつりよき山よの山

山よ

内目連  
吉田

この山は光の防の山にその山奥と片  
きしり得る所の山にその山奥と片  
あつりよき山よし山よ安山何れの山  
其を産この山よりあつりよき山よの山  
送る山よその山よあつりよき山よの山  
山よあつりよき山よその山よあつりよき山よの山  
とて四山山よその山よあつりよき山よの山

山よあつりよき山よその山よあつりよき山よの山

山よ

山よあつりよき山よその山よあつりよき山よの山

山よあつりよき山よその山よあつりよき山よの山

山よ

山よあつりよき山よその山よあつりよき山よの山

山よ

山よあつりよき山よその山よあつりよき山よの山

山よ

つり山 家とあるの 田用状 楚石

浮水ハ 横敷一 懸水ハ 飯橋 可云

る白の遠く ちよと遠く 柳 松

怪水さふ ちよと 捨水ハ 里心

人のちよ 何と 妻の ぬりうす 五月

孫子の 繞ヌメめく 切水ハ ちよ川ハ 河津

ちよと ちよと ちよと ちよと ちよと 素文

よん 日片 下此 天敵 禰前 壺外

名録

お虎也 廉ハ 中ノ ちよ 虫ハ 又 可公

日のあー 松よ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ 柳 松

斗の 難ハ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ 楚石

氣ハ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ 如周

ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ 流 龍

と 乃 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ 素 礎

名田

おま略

折しつと照りし月をほめてそのまは 流瓢

山影の月をまわりの影 つ本

伊佐

おま略

ねこあゝ色やあやうで松の陰 路周

むふこゝろも清くぬ月 つ本

名録

幾きいふ茶ふさぎはふやまのめ 和名

結ひよそは地も山家のむえれど 梅舟

うぐいあやあしあ 能教一 路周

石子保

おま略

海山よりさしはちきり月の影 柳路

あゝつをほる連ふ つ本

送あ

つ本竹坊石んぼのゆるさぬてしれ  
崎名下へ枝とむきしん事う其まき  
し志りの政院をけり代りけり  
永敷のけりしうれをそね余彼  
そ免うまなうしを宰府おふ祀乃  
日後りあれし志きりし出さるよ  
あふよんし十有月余里と痛て吉岡の  
訳までん送りやあしん筑紫あちま  
山しんわりの懐懐ちれ

茶しよらんや山の色れ何あまとし 茶文

茶岡の雲

つ本竹坊この赤月う雲と猿森あり

きりよ事し新ちる古松園よ志らよの  
ゆるしあはれ

序くうあまの序の縁うり 里凡

友拾ふあのみ月し有明 つよ

谷塚 古松園連

おし儘くすの甲ひ草木のいし 林吉 李樹

えり月しらんし時をて色り 亮坡

十九日吉岡ときき吉岡あしん長野し







博多

是より博多の扱子と尋ねて  
此れは宰府あり証のりよまき  
うらまはれ二狂ゆるや家い博多の扱  
ちんじとあひいよく人面をいせ  
をよとい 山神の川もいせ  
いよくよはれいありき  
いよ用のりありて宰府よまき  
客のりくみきて送りほし  
宿なく博多よまきあり  
人のいよまきあり  
いよ外子あり  
いよいよまきあり  
いよいよまきあり  
いよいよまきあり

るちりーまていん娘りーさあてのお つ小坊

せめてを月のそいしをいお 博多

扱をまきよ二狂ゆるの湯をい  
わく宰府ありの湯をい  
いよいよまきあり

乃よいんまてう 此をよ 唐田 吾涼

くよ浦近よ 夕月のあ つ小

つ小坊の扱を博多の津い  
いよいよまきあり

恥てもらは。台屋の好れ。暮あさし。 亦朝

夕暮る。ついで。又月。とついで。 以年

帛。海。く。く。有。る。を。れ。産。持。ま。さ。く。 梅言

善。提。の。き。と。ん。子。刺。さ。つ。い。な。し。 茶味

傳。り。れ。指。折。を。し。し。今。と。し。し。 翠凡

大。キ。を。弁。し。し。る。少。中。胃。破。の。 知夕

お。と。や。く。の。も。あ。る。白。う。そ。れ。以。出。 云々

神。ま。し。し。一。を。れ。き。う。さ。し。心。痛。 世世

名録

も。草。本。中。や。余。の。ま。の。を。海。に。延。き。し。ん。 亦朝

り。燈。し。う。さ。き。を。し。し。の。く。段。き。り。し。 茶味

草。本。中。や。余。の。ま。の。を。海。に。延。き。し。ん。 翠凡

ん。や。し。る。氣。し。し。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。ん。 知夕

暮。も。し。遠。く。さ。さ。き。よ。し。は。き。て。風。中。 云々

欣。し。し。し。月。し。し。し。し。し。し。し。し。し。し。 世世

新。地。し。し。し。し。し。し。し。し。し。し。し。し。 梅言

肥前

長崎

ふり住む山の産物なる今井田氏伝来の  
の器家子三百里程の草鞋と名く  
りしありく長崎より云々云々  
旅のこころはさき

長におやを詞しつる長崎は

長崎

春所々風中の然るも春は林と  
来りて長月のく先世長崎に  
先とて教員子のものと旅情を体免

よの信切るるさき長崎は長崎  
のさきもくちり長崎は

風中子出て厚の啼く日長崎は

長崎

長崎

むり西毒黄鵠の妻先作世長崎に  
旅原して旅子の一門と云々  
加十其帛の妻もその旅子も  
その旅何れの旅も全一  
多湯もそのゆるりとも  
先とよけ九の子旅情の旅乃  
旅子も旅情のお旅も

氏子のまゝ一けんをまゝ一しては月日の  
 群信を曉天より各々あふ環浦子  
 信せりともやゆきより一は地を唐漢子  
 しては沙帯を陀倉難も入りやうまを  
 凡一し縁縁の裾をうきり日は去る  
 の傍り映してさるをさる免の目を  
 よほこり一免ゆきととくわはる韻一  
 耳とくもむきては信愛と時公たさる  
 家漂泊の活計をさる一

菊の日や唐人をまじりてさる一

三本坊

瓢箪のりやまの月のまゝは

越後

ひやうまゝなふ一藤のまゝもさるて

李望

ほろり風の又もやきり

赤良

あつりつたむらさきのや

其家

え暇さあてよん孫よのや

たむ

掛緒うあて掃子は懼もさるひかり

只こ

あふまゝさる一本堂のまゝは

宇曉

川音のあちこち一はりさるる心

里正

さる清とつえい用平用立

魚坊

さるけ延一はむもさるる

里美

ちのあかりをよりのも幸のふみ舞 有口  
 三味線も浮ちりり此奥に糸 沈  
 啼くとほと免の鶏々啼く 坊  
 かりほくちるよるの籠のるよふ年 妻  
 依はしきしお主のおき免 事  
 見えしを佛もうりう神よまて と  
 世男のねもみよまる時 船  
 その義もおとほの月をさ 晴

賑ひ欠この隠れも出あ 呂  
 酒湯程いふはくさあちまじ 口  
 程よふ隠れえのこさあね 袋  
 張ついもあ川等まの浦はさ 魚  
 ほふりし隠く正日のま 正

のりて新着怪話の媚とりめより  
 度りてまほの枕とねこそお思ある  
 のこととあついな川の打語ふらん  
 志ううたれ之夕の風情は和音の幽玄

うして蕉門家の継承しつて時より  
遺化とせしつてその日とれ時のまゝに  
急しきおしむるんとあつたを  
蕉門とせしむるをまゝにせしむる蕉園なり  
号とせしむる蕉園の風流のこゝろを

つよ坊

ゆきをよも雪のぬめをよも

層月おとら 程をよも

今時と 神よちよと 空の入りと

ゆきよも 雪のぬめをよも

ゆきよも 雪のぬめをよも

ゆきよも 雪のぬめをよも

各派

遠く子よとれつて能い

ゆきよも 雪のぬめをよも

樓招一本房のこゝろ

新地をよも

ゆきよも 雪のぬめをよも

園庭よも

中しんはくはくしんもあかあせり  
 漢のちあいのめやんり紅きふ  
 くるるあもすもすふよふあ月  
 淋こも霧のあれを森のふ  
 可しはふもあもあよ梅のふ  
 そこくるる月もあふちる小船我  
 あ仙やクアれさるるをさやむる  
 月よるもをぬてよん月こふ  
 芝野  
 宇殿  
 李咏  
 勝山  
 家康  
 仙芝  
 吳石  
 起野

花の例よのあしうくはくたんわ  
 松蔭よりあるる退るる波下  
 蒼きあやももも拾ふるこも味  
 小あらしりあもあよんあふる  
 去る風よあふをはきこや藤のあ  
 文鏡  
 郊水  
 藤屋  
 呂く  
 里久

十二巻

二おの防のふりありてあはふは  
 とそし二おの月あまの澄あふり



二枚をうらふ世はや各々ありあふ境の浦  
とつるさうりそこふ丸山のゆりともひ  
そのほえも一丁のなまえいりつてあそぶ  
継流の虚実ともいふ自在なれよ  
ふくふく信あり

五この連流よりちかみよ

後の月やさしむらゝも後れ浦

茶坊

る列

為りてくともふひありしは昔は  
のりとも旅の道のりともい  
定めゆかりの家門は信成ともい

連流日こそ語いありしはより菊  
上月のや席をこのまゝとめりともい  
るるれりなくちと唐流のたひも  
そのころ壯麗の地ふりおと始れり  
あふらんみづく茶の神の旅さのあを  
あふひよ金殿おくもこの人くふ  
送るまきねのわい

長月やさしむらゝも後れ浦

茶坊

